

平成 19 年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
第 2 回森林生態系保全再生手法検討ワーキンググループ
議事概要

◆日 時 平成 19 年 11 月 8 日 (木) 10:30~12:30

◆場 所 環境省近畿地方環境事務所 会議室

◆出席者

<委 員>

木佐貫博光	三重大学生物資源学部 准教授
佐久間大輔	大阪市立自然史博物館 学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
野間 直彦	滋賀県立大学環境科学部環境生態学科 講師
日野 輝明	森林総合研究所関西支所 野生鳥獣類管理チーム長
松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 講師

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	田邊 仁 統括自然保護企画官
	高橋 勝志 野生生物課長
	西野 雄一 野生生物課 移入生物専門官
	櫻澤 裕樹 国立公園・保全整備課 自然保護官
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志 環境部リーダー
	保延 香代 環境部リーダー
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人 第三研究部長

◆議 事

1. 大台ヶ原における自然再生の目標

(1) 目標の見直しについて

① 東大台の森林再生目標について

- ・ 温暖化により植生は変化する。現在の東大台はトウヒの生育できる温度環境ではないという可能性はないか?
- ・ 昭和 30 年代のトウヒ林のうち、代償植生の部分は、人為的な影響で成立したといえる (大正時代の皆伐)。東大台の森林再生の目標としては、トウヒ林に限定せず、オープンランド (ミヤコザサ草地) を少なくし、従来あったと考えられ

るヒノキなども含めた林を再生するとした方がよい。

- ・ (参考資料2 図9「オープンランドの経年変化」について) 1947年のオープンランドはもう少し小さかったのではないか。

→疎林も含めてオープンランドとした。

- ・ オープンランドは草地に限定すべき。

→参考資料2 図9は草地面積の拡大について誤解をあたえる可能性があるため、修正する。(1947年のオープンランドは削除)

- ・ 1962年(矢頭)の時代では、既に東大台の大部分は二次林(トウヒ再生林)であったが、大正時代の文献でも東大台にはトウヒが存在していた。
- ・ 今現在、トウヒが生育しているので、トウヒも含めて考えてもよい。
- ・ 東大台、西大台ともに植生は多様である。樹種を限定すべきではない。
- ・ トウヒは大台ヶ原が分布の南限であり、シンボリックな樹木であることから、保全対象になり得るが、植栽してでも守るということになると疑問がある。現在生育している場所について、できるだけ自然な形で保全していく必要がある。

② 目標の見直しの進め方について

- ・ 「大台ヶ原自然再生推進計画」(H17)で示した長期的目標は変更する必要はない。まず先に中期的、短期的目標を検討した結果をもって、長期的目標の検討へ繋げていく方がよい。
- ・ どのような条件で、どのような樹種が発芽するかを評価することで、短期的目標は達成できる(短期的目標:実生の生育環境を明らかにする)。短期(平成17年からの5年間)の調査結果を積み重ねつつ、中期的目標はもう少し具体化する必要がある。中期的目標については、具体的な期間を示し、数値目標についても示していく必要がある。
- ・ [事務局]長期的目標は変更せずに中期的目標を具体化するということで進めていきたい。

③ 中期的目標について

- ・ 稚樹が育つことを目標とするのは正しいと思うが、それに対してどこまで手を加えることができるのか、シカの密度の問題も含めて考える必要がある。ギャップ地において20年くらいで身の丈を越えるような稚樹を育てる手がかりが必要。シカをもっと減らす方向まで踏み込む必要がある。
- ・ 稚樹がある程度育つまでササを刈り続けるなどの手を加えてよいのであれば、具体的な森林再生のイメージが見えてくる。
- ・ 林内において後継樹を守らないと森林の減少は止められないのでは。森林が減少していく境界線で森林の衰退を止めることが中期的目標になる。

- ・ 稚樹を守るためには今のところ柵は必要である。柵の中ではササを刈る必要がある。それを自然再生とすることの是非については考える必要がある。正木峠の柵の中の稚樹はササの伸長とともにどんどん枯れている。現在生き残っているものを保全していく必要はある。
- ・ ミヤコザサ群落の拡大を防止するという考え方の中には、草地だけではなく、林床のミヤコザサの分布拡大を防止するという視点も必要である。
- ・ ミヤコザサについては、ミヤコザサ草地と林床のミヤコザサに分けて考える必要がある。
- ・ ミヤコザサをそのままにしておくと、いくらシカを取ってもシカは減らない。場所によってはミヤコザサをなくしてしまうぐらいのことも考えてよいのではないか。
- ・ ササとシカの関わりは立地条件によって違う。広葉樹林（ブナ林）はシカがいないと更新しない。
- ・ 草地では光が強過ぎて成長が抑制される。ササ地での後継樹育成については、光抑制についても考えて欲しい。

(2) 再生事業の今後の方向性について

① 自然再生計画のスケジュールについて

- ・ 自然再生計画の見直し時期が、ニホンジカ保護管理計画の見直し時期と年度がずれているが、ニホンジカの保護管理計画と合わせるために次の見直し期間（21年度以降）を短くすることはできないのか？

② 検討すべき項目について

- ・ 検討すべき項目については、優先順位を決めて、いつまでにこれを決めるといったスケジュールを決める必要がある。あまり時間をおかず、短期集中型で議論すべきである。
- ・ 中期目標を優先して議論してはどうか。
- ・ 中期的目標については、植生タイプごとに示す必要がある。
- ・ 中期的目標において考えるゾーニングはそれほど細かく示す必要はないと思うが、東大台と西大台に分けた視点が必要である。
- ・ 中期的目標であげる植生タイプはそれほど多くは示せないだろう。まずは、ゾーニングのたたき台を作る必要がある。森林の中ではいかに後継樹の育成を進めるか。草地では、いかに拡大防止を進めるか。
- ・ 現在の事業評価は必須である。以前の評価軸で評価し、次の評価軸（中期目標に対して）で評価する。
- ・ ギャップ地に関しては、乾燥化や水に関する視点を入れるべき。ササが入ること

によって林内の湿度や土壌湿度がどのように変化するのか。水収支の考えを入れる必要がある。集水域は GIS 化で示すことができるのではないか。

- ・ゾーニングには森林 GIS を導入する必要がある。地形、方位も含めて重ねて検討する必要がある。
- ・GIS に取り込む情報は整理しておく必要がある。
- ・自然再生計画の見直しに向けて、大台ヶ原地域のササの被度調査を実施する場合には、境界線の部分に着目して歩くようにする。

2. 植生保全対策について

10/31 に実施されたニホンジカ保護管理検討会において示した大台ヶ原における植生保全対策について。

- ・単木保護対策として、ラクトロン、ヘキサチューブが挙げられているが、失敗事例が多いため実施については検討した方がよい。
- ・(ラクトロン、トリカルネット、ヘキサチューブなどの苗木保護対策について)「実験的に実施することを検討する」としているが、この表現ではこれらの苗木保護対策を導入することと捉えられてしまう。「実施の是非を検討する」といった表現に改めるべきである。
- ・ラス巻きについては、樹幹のコケへの影響について検討すべきである。プラスチック性のラスについては、コケの生育への影響が少ないようである。しかし、施工性、耐久性に劣るといった欠点もある。

[文責 近畿地方環境事務所]